

ヘルマン・ノールの教育学における青年の問題

伊 藤 一 也

(教育史研究室)

(平成3年4月25日受理)

Das Problem des Jugendlichen in der Pädagogik Herman Nohls

ITO Kazuya

I. 序

本稿の課題は、ヘルマン・ノールの教育学における彼の青年理解、青年観を考察し、さらには、その教育学にとっての青年という問題の意味を解明することである。このような観点からノールの教育学を概観するとき、まず次のような点が目を引く。すなわち、そこにおいては、青年の問題を含めそもそも発達段階という視点が正面には位置づけられていないという点である。

ノールの教育学の最もまとまった体系は、『陶冶の理論』(Die Theorie der Bildung, 1933)に見いだせる。その第5章、『陶冶可能性と陶冶意志』において、被教育者の存在と発達の構造が論じられている。発達段階に言及されるなら、それが最も相応しいのはこの部分であろう。しかしそこにおける被教育者論の枠組みあるいは基礎を提供しているのは発達段階という視点ではなく、人間存在を垂直構造もしくは階層構造と水平構造において捉えるノール特有の人間学なのである。

ここで言われる垂直構造とは、生物学的欲望の層、気概(Tyros)の層、精神的根本方向と言われる理念への憧憬の層、自我の統一作用の層という四層からなる階層構造である。ノールは、その着想を遙るかプラトンから得ている。水平構造とは、印象から感情的の評価を経て反応へと至る、受動から能動への過程を意味する。ノールは、この心理過程を初めて学的に基礎づけた人としてディルタイとジェームスを挙げている。

このような人間存在の構造モデルをふまえて、被教育者の陶冶可能性と陶冶意志が論じられているのである。とりわけ重要な枠組みとなっているのは、垂直構造である。それ故、ノールの被教育者論は、プラトンの理念の応用されたものという印象さえ与える。しかも、教育の目標、発達の到達点たる陶冶理想を、ノールは、精神(Geist)と構え(Haltung)との二要素から成る教養(Bildung)として規定する。そしてこの精神と構えは、この垂直構造における上位二層の心的作用すなわち精神的根本方向と自我の統一作用に相当するものと解釈される

(PB, S. 159, 169)。¹⁾かくして、ノールの被教育者論は人間の発達の事實的諸現象から出発すると言うよりも、理念から、理想から想定されたものという印象を免れないのである。

このようなノールの人間学が最も体系的にまとめられているのは、『性格と運命—教育人間学』(Charakter und Schicksal, Eine pädagogische Menschenkunde, 1938)である。ここでは、垂直構造、水平構造という上記二つの視点以外にも人間理解の様々な視点が挙げられている。発達段階についてもそのような視点の一つとして言及されている。しかし、この教育人間学の全体の構成から見ると、それはあくまで部分的な位置づけを与えられているにすぎない。ちなみにその内容は、『青年福祉—社会教育講演集』(Jugendwohlfahrt, Sozialpädagogische Vorträge, 1927)に収められている『思春期の性格特性』(Charakteristik der Reifezeit, 1925)における簡潔ではあるがかなりまとまった青年論を再現したものとなっている。これについては後に触れることとなる。

さて、発達段階という観点からは不十分な印象を禁じえないにしても、ノールの人間学とこれに基礎づけられた教育学が全く虚構的であるわけではない。それは、それなりの現実性と説得力を持つものである。なぜか。それは、やはりそこに表現されている人間観が人間存在のある本質と共鳴するものであるからと言えよう。ところで、人間存在とは生成しゆく存在である。生物学的条件、環境的条件に規定されつつ、また自己を創造しつつ、発達しゆく存在である。それ故、この人間存在のある本質とは、このような生成し、発達しゆく存在におけるある本質に他ならない。ノールの人間学、教育学はそのような本質と共鳴するものなのである。

かくして、表面上の言葉や記述にこだわらず、そこに語り出された人間観の本質的次元を読み取ろうとするならば、我々はむしろノールの人間学、教育学から次のような印象を得ることができる。すなわち、それらはまた人間の生成、発達の本質についての理解を反映したものであり、とりわけそのある局面に深く関わるものであるという印象である。その局面というのが、本稿の問題にしようとする青年という発達局面なのである。

従って、ノールの教育学における青年の問題を考察するということは意味のあることである。ノールの教育学は、その根底を成す人間観の次元で人間存在の青年という局面に深く関わっている。ということは逆に、青年の問題の考察は、ノールの教育学の根底的次元への通路を切り開くものと言えるのである。本稿の試みは、そのようにしてノールの教育学の本質の一端を明らかにするという意味を持つのである。

以下、本稿は、Ⅱにおいてノール教育学のいかなる領域からいかなる青年理解が語り出されているかを明らかにする。Ⅲにおいては、その青年理解の特質を検討する。Ⅳにおいては、そのような青年という問題のノール教育学にとっての意味を解明する。繰り返すなら、そのことによりノール教育学の本質の一端を掴みだすことが、本稿の最終的な課題となるのである。

Ⅱ. ノール教育学における青年の問題とその理解

1. シュトゥルム・ウント・ドラングとの共鳴

青年期は、しばしばシュトゥルム・ウント・ドラングの時代にたとえられる。すなわち、青年期における生命力、生命感情の急激な昂揚は未だ経験により中和ないし制御されることを知らず、しばしば創造的ではあるが破壊的な、あるいは破壊的なまでに創造的な作用をもたらす。そのような傾向が思春期を反抗期たらしめ、青年期後期に様々な分野でラディカルな若者を生

み出す。シュトゥルム・ウント・ドラングは、まさにドイツ精神史における青年期であったと言えよう。無味乾燥な知の体系や形骸化した習俗、閉鎖的、抑圧的な政治的、社会的体制の支配する状況の中で、沸騰する青年の感情は文学においてその噴出口を見いだしたのであった。

そもそもノールの教育学及びより広くその教育思想には、その根底に一貫してこのようなシュトゥルム・ウント・ドラングへの関心、あるいはシュトゥルム・ウント・ドラング的関心が見いだされる。それ故シュトゥルム・ウント・ドラングはノール教育学理解の一つの重要な鍵概念である。ましてやその青年理解を問題とするならば、考察の焦点はまずここに当てられねばならない。

ノールの最初のまとまった論文は、『ソクラテスと倫理学』(Sokrates und die Ethik, 1904)である。ノールはこれにより学位を取得している。二十五歳になる年であった。この最初の論文に後の教育学者ノールの思想的萌芽を見て取ることは、正当な試みであると言えよう。とりわけ本稿の連関においては、その序の冒頭にある次のような言葉が注目に値する。すなわち、「私には、生の非合理性と人間の倫理的態度を概念的に把握することの不可能性についての確信が、ソクラテスの問いのかくも錯綜した迷宮において私を導き、おそらくはこの絶えること無く考察されるべき事実を改めて実り豊かに取り扱うことを可能にする光を与えてくれた。」(SE, S. 1)

ノールにあっては、この生の非合理性の確信がソクラテスのいわゆる無知の知の意味を解釈する視点なのであった。すなわち、一方でソクラテスは、「彼の内面の道徳的内実の全てを論理的に把握する」(SE, S. 55)という課題を追及した。他方で彼を衝き動かしていたのは、そのような概念化の作用のついに及び得ない心情の内奥における確信であった。かくしてソクラテスの探究は常に成果を見ないで終わる。しかし、だからと言ってそれは決して不毛ではない。その場に居合わせた者に、ある偉大さが直観される。「彼の成果に至ることなき生の生き生きとした(lebendig)力」(SE, S. 62)が直観されるのである。

ノールによれば、プラトンを初め彼の弟子達は「自らを語り出すこと無しにかくも他に超然としていたこの生の内実を把握可能にし、他者に伝えるための手段を、唯一芸術表現という非合理的なものに見いだした」のであった。そして、プラトンのとりわけ初期の作品の魅力と真理として彼は次のように言う。すなわち、「何か一つの知識がそこで説明されなければならないのではなく、生の気分が、エロスを心髄とし、知を愛し求める生き生きとした共同体が表現されうるものであり、師の人格において、すべての知識を越えた真理の確信と意志の偉大さが現れ出る」のであると(SE, S. 62)。

ノールにとっては、古典としてのソクラテスではなく、その生の生き生きとした内実に迫ることが重要であったと言えよう。このようなノールの問題関心、あるいはまさに「生の気分」は、すぐ翌年に表された『ヨハン・ゴットフリート・ヘルダー』(Johann Gottfried Herder, 1905)において引き続いて見いだされる。そしてここにおいて我々は、このような生の気分がシュトゥルム・ウント・ドラング的な気分と表現しうるものであることを確認することができるのである。

「その若き日の最も美しい高慢の中で、ヘルダーはかつて次のように言った。私が古典的であるかどうかなどは、私にとってはどうでもよいことなのだ。もし私が充分生きて(lebendig)さえているならばと。この言葉は、私には、今日においてもなお我々にとってヘルダーが何であるのかということについての公式のように思えるのである。」(DB, S. 15)このような

書き出しで『ヘルダー』は始まる。確かにこの文章は、シュトゥルム・ウント・ドラング世代の思想家ヘルダーがノールにとって何であったのかを十分に推測せしめるものであるといえる。

この論文は、ヘルダーの足跡を伝記的にたどりつつ、その思想的発展を叙述していくものである。しかし、ここにおいて問題とされているのは、単なる出来事の経過以上のものである。それは、ヘルダーのまさに生き生きとした (lebendig) 生が、「我々にとって」すなわちノール自身にとって何であるかの確認の作業であり、さらに言うならば、ヘルダーにおいて共鳴を見いだしたノール自身の思想をヘルダーにたくして表現しようとした試みであったとも言いうるのである。

ヘルダーにおいてシュトゥルム・ウント・ドラングは一つのの思想的結晶を見た。ノールによれば、それは「生」(Leben)の思想であった。「彼の思想のもっとも深い出発点と究極の目標は常に同一のもの、すなわち生であった。」(DB, S. 27) 生とは、「概念、抽象、表象、規則等々そもそも我々の内なる知識や言葉に関係するもののすべて」に対する「それらがそこにおいて根源的に生じて来た生き生きとした諸力」であり、あるいはまた「存在の硬直を招来したすべての形式」に対する「存在の自由な、奔放な流れ」である(DB, S. 28)。すなわち、合理的な知以前に、あるいはその根底にあってそれを生み出し、それを支える非合理的な力、感情的、創造的力、あるいは存在の奔流であるとされる。まさにヘルダーは、この生の概念をもってシュトゥルム・ウント・ドラングの精神を思想として表現したわけである。ノールがソクラテスにおいて見いだそうとしたものも、またこのような意味でのソクラテスの生であったということができよう。

さて、ヘルダーにとって生とはまた同時に民族とその歴史という具体的な姿において自らを語りだすものであった。そして、民族の歴史において生が最も力に満ちているのは、その原始の時代なのであった。そこにおいて民族は個性的であり、その故に面的であり、面的であるが故に創造性に満ちているとされる。歴史の進展は必然的にこの一面性の解消へと向かう。普遍性、世界性の時代がやってくる。生の力は減退し、むしろ意識、理性が支配権を得るに至る。これはこれとして人間が引き受けなければならない宿命なのである。

かくしてノールは、ヘルダーの思想が必然的に生と意識との二律背反を表現するに至るのを見る。生が同時に必然的に二律背反の内にあるということは、ノール自身が自らの思想において、そして自らの教育学において直視せざるをえなかった問題である。ノールもまた、面的にシュトゥルム・ウント・ドラング的ではありえなかったのである。

以上、ソクラテス、ヘルダーという二人の人物の思想の核心に迫ろうとした初期の二論文において、我々はそこに共通してノールのある根源的問題関心、あるいは生の気分を確認することができる。それを我々はシュトゥルム・ウント・ドラング的問題関心、シュトゥルム・ウント・ドラングの気分と言うことができる。そしてさらにそれは、それと対極的なものとの二律背反的關係を予想するものであった。

この時点では、ノールは未だ教育学に足を踏み入れてはいない。また、青年論といえるようなものに関心を示してもいない。しかし、ここで確認されるノールのこのような思想的特徴は、後の彼の教育思想を解釈する上で重要な視座となるのである。

2. 青年運動との出会い

以上考察した二論文において明らかなように、ノールの学究生活は倫理学、思想史さらには

美学といった人間の精神世界の広汎な領域において始まった。やがてその関心が教育の問題へと集中し、教育の領域にほとんど没頭した活動が行われていくのは、第一次世界大戦後のことである。²⁾

従軍経験を通して、ノールは、人間性というものが厳しく悲惨な状況の中でどこまでゆがめられうるかということを目の当たりにすることになる。そのことについての彼の憂慮は、やがてドイツ民族における人間性一般の命運についての危惧へと増幅されていく。³⁾ さらに敗戦の混乱は、ノールの危機意識と課題意識をいやが上にも先鋭化していくことになる。ノールは、民族再興の道を教育に求めることになる。

戦後まもなく出版された『教育及び政治論集』(Pädagogische und politische Aufsätze, 1919)の序文には、次のような言葉がある。「青年を快活で、勇敢で、創造的な行為へと導く新たな教育において他に、我が民族の不幸を救済する手段はない」(PA, Vorwort)と。ここに、ノールが教育へと託すものが何であったかを我々は知ることができよう。

同時に注目すべき点は、ここにおいて特に青年の教育が強調されているということである。その理由は、様々挙げられよう。可能性と力に満ちた若き世代に未来への希望を託すことは、ごく自然のことであろう。しかし同時に、この文脈だけでなく、この前後のノールの足跡をたどるならば、さらに次のような点が興味を引くところである。すなわち、すでに戦争以前にノールは青年運動に参加していた若者達と関わりを持っており、少なからず彼らから影響を得ており、また彼らに影響を与えているのである。

ノールは、美学論文『絵画の世界観』(Die Weltanschauungen der Malerei, 1908)により教授資格を獲得するとともにイェナ大学において私講師となる。当時イェナに学んでいた学生の中には、ワンダーフォーゲルの経験者など青年運動に参加し、青年運動の気分の中に生きている者が少なからず存在していた。1909年、オイゲン・ディーデリクス(Eugen Diederichs)という出版業者の誘いにより、そのような学生を中心に小さなダンスのサークルが生まれた。やがてこれが新たな社交形式、新たな生活様式を創造するという意識を持った、まさに文化的なサークルへと発展していった。それは好んで踊られたダンスの歌の文句にちなんでゼーラ・クライス(Sera-Kreis)と呼ばれるようになる。

彼らは、ともに踊り、歌い、詩を朗読し、山野を渡り歩き、祝祭を催した。そのような活動の中から、新たな社交形式、新たな生活様式が醸成されていった。いかなる生活様式か。メンバーの一人で後の教育学者ヴィルヘルム・フリットナー(Wilhelm Flitner)の言を借りるなら、それは当時全ドイツを浸していた次のような気分を具現するものであった。すなわち、「人々は、十九世紀の社会的分裂を超え、服装と食生活における自然さを求め、住まいの美と素朴さを求め、芸術の意味を甦らせ、芸術が再び生活を形成する力を持つことを求めた。人は、人間の身体性を肯定し、社会的良心を覚醒させ、考えを異にする人に耳を傾けることを教えた。世界市民的な開放性と同時に、地域の独自性への感覚も新たに目覚めた。固有の創造力を持つ子供と若者という人生の段階の固有性が再び発見され、肯定された。あらゆる生活集団の共生に対しての心情と悟性が目覚めていった。」⁴⁾

はたしてフリットナーの言うように当時本当に文字通り全ドイツをこのような気分が浸していたのか。その問題はさておくとして、そのようなある時代精神の先端の体現者としての自覚と自負が、ゼーラの成員の意識をいやが上にも昂揚されていたことは想像に難くない。1913年、ゼーラ・クライスはディーデリクスと共にホーアー・マイスナーにおける青年運動の大集会に

参加している。ちなみに、後に論理実証主義哲学を代表する哲学者となるルードルフ・カルナップもその主要メンバーの一人であった。

ノールは、大学でこのような学生達と出会ったのである。上のフリットナー、さらにはゼーラのリーダー、ハンス・クレーマース (Hans Kremers) が相次いでノールの助手を努めていった。クレーマースはやがて第一次世界大戦において戦死する。その死は、やはりゼーラのリーダー的存在で彼の愛弟子であったカール・ブリュグマン (Karl Brüggmann) らの戦死と共に、ノールを苦しめることとなる。その『社交のドイツ的理想について—カール・ブリュグマンの思い出に捧ぐ』(Vom deutschen Ideal der Geselligkeit. Dem Andenken Karl Brüggmanns gewidmet, 1915) は、彼らの生の理想を讀えた挽歌なのであった。

このような学生達の求めに応じる形で、ノールは、初めて教育学を講じることとなる。この講義から二つの論文が生まれる。『教育の諸対立』(Die pädagogischen Gegensätze, 1914) 及び『教育における世代関係』(Das Verhältnis der Generationen in der Pädagogik, 1914) である。このうち後者は、青年を主題としたものであり、本稿の連関においては非常に重要なものなので後に考察する。とりあえずここで重要であるのは、ノールが初めて——すでに第一次世界大戦の以前に——教育を論じる機縁となったのは、青年運動に参加していた学生達との出会いであったということである。

第一次世界大戦後、教育学に本格的に関わり始めてからも、ノールと青年運動及びそこに参加した若者との結びつきは維持されていくこととなる。この時期、ノールの教育学活動は、専ら社会教育の領域に集中されていく。当時この領域の実践の担い手となっていたのは、青年運動出身の若者達であった。彼らの多くは、戦後ゲッティンゲン大学に移っていたノールのもとに集り、その指導のもとで自らの実践の教育学的基礎を築き、再び社会教育の場へと帰っていったのであった。クルト・ボンディー (Curt Bondy) とヴァルター・ヘルマン (Walter Herrmann) は、その代表的な例であろう。二人は、青年運動の出身者であり、後に少年刑務所の所長として青少年犯罪者の教育の領域で指導的役割を果たすことになる。あるいは、ノールの理論、実践両面における強力な影響を受け、青年運動出身の学生達の多くが、青少年育成 (Jugendpflege) の領域に進んでいったと言われる。⁵⁾

さて、第一次世界大戦前夜の時点に戻ってみよう。いったいなぜ学生達は、未だ教育学の専門家でもないノールに教育学の講義を求めたのであろうか。なぜその講義が、当時のイエナ大学としてはかなりの大人数であると言われる115名もの受講者を集めたのであろうか。⁶⁾ 彼らは、当時イエナにあって教育学を講じていたヴィルヘルム・ライン (Wilhelm Rein) のヘルバルト教育学という「干からびたパン」では満足できなかったという。⁷⁾ その彼らが、ノールには何かしら自らの渴望を満たしてくれるものを感じていた。彼らを引きつけたのは、ノールの何であったのか。

一つには、その人となりそのものが青年を引きつけるものであったと言えよう。それは、彼の弟子達が等しく証言するところである。フリットナーは、「ノールの生命感情 (Lebensgefühl) は、飲びに溢れたものであった」と言い、⁸⁾ やはり彼の愛弟子の一人エリザベート・ブロホマン (Elisabeth Blochmann) も、ノールの「多面的で力強い生命感 (Lebendigkeit) について語る。⁹⁾ あるいは、カルナップは次のように回想する。「私は、ヘルマン・ノールのゼミナールを格別の喜びと感謝とともに思い出す。……私の友人達も私もとりわけノールに引きつけられていた。なぜなら彼は、当時のドイツの大抵の教授達とは違って自分

の学生達の生活や考えに親身な関心を寄せていたし、そのゼミナールや私的な会話の中で、私達に、哲学者達について、その『生』に対する立場や文化的背景を基盤とした一層深い理解を与えようとしていたからである。」¹⁰⁾

人は時として自分とは異質なものに心引かれる。しかしまた多くの場合、自分と同質のものにまさに共鳴し、それによって鼓舞される。上の証言を踏まえるなら、若き学生、とりわけ青年運動の直中を生きていた学生を引きつけたのは、ノールの内なる青年的と言ってよい生命感情であったと言えよう。青年の体質を飲みに溢れた生命感情の躍動と規定するのは、あまりにロマンチックかもしれない。しかし、そのような面が青年の本質に潜むということ自体は否定できない。現に青年運動は、ロマンチックな憧憬に衝き動かされた運動であった。ノールはこの運動の参加者達に極めて内面的に結びつき、その共感を得ていたのであった。

また同時に上の証言、とりわけカルナップの言葉から、我々は、ノールの人格に内在していた教育的衝動を知ることができる。フリットナーもまた同時に、「ノールは、彼の学生のことを父親のように気づかった」¹¹⁾と言っている。青年運動もまた、その本質において教育的衝動を秘めた運動であったと言える。それは、もともと青年の自己教育的運動であった。さらにその自己教育的エネルギーは、次第に社会的な広がりを見せていく。すなわち、社会教育の領域へと流れ込んでいく。ノール自身の言葉によれば、「青年運動の第一世代の最良の人々は、プロレタリア青年運動においてすでに政治的立場をとっているのではない限りは、ほとんど例外無く教育的タイプに属しており、そして教育において自己の生を実践的に実現する場を求めている。逆に、青年運動の精神の息吹をたとえ遠くからでも感じたことがなく、またこの教育的良心を自らの責任として引受けようとしめない教育者などは、じきにいなかった。」(PB, S. 17)

かくして青年運動の渦中にいた学生達がノールに教育学の講義を求めたことも、またそのノールが後に教育的活動に没入していくことも、そして、教育の世界でノールと青年運動の参加者との結びつきが維持されていくことも、すべてはある必然性を持った展開であったと解釈することが出来よう。出会うということはまさに偶然であるが、出会えたということは、内的必然性の故なのである。

飲みに溢れた生命感情と教育的衝動、おそらく両者は渾然一体としたものであったろう。ノールと青年運動は、それらの共鳴の中で出会い、共に教育の領域に歩み入ったと言える。興味深いことに、先に触れたノールの初期の二論文において、このような生命感情と教育的衝動はすでに語り出されていると考えられる。すなわち、ノールが『ヘルダー』において、このシュトゥルム・ウント・ドラングの思想家に託して語り出したのは、自分自身の生命感情に他ならないのであった。フリットナーやプロホマンの言う彼の生命感情とは、青年運動に参加した学生達を引きつけた生命感情とは、まさにここに語り出されていたこのシュトゥルム・ウント・ドラング的とも言うべき生命感情であったと言いうるのである。ちなみにノールは、青年運動を論じる箇所において、この運動をシュトゥルム・ウント・ドラングの精神の新たな展開と捉えている (PB, S. 12)。

『ソクラテスと倫理学』の主題は、ソクラテスとはいかなる人であったのかということであると言える。しかし、このソクラテスはいかなる人であったかということは、彼とその弟子達との教育的共同体においてのみ、その出会いの現実の中でのみ確証されうるものである。そこで何かが師から弟子へと伝えられていった。それが何かは、概念的には把握できない。ソクラ

テス自身にとってもそれは不可能であった。ノールもまた、それを師弟の出会いの場面における出来事として捉えうるのみである。すなわち、師弟の最も根源的な生命感情の共感の中での出来事としてである。教育ということを言うならば、それはまさに最も根源的な意味での教育的出来事であった。ノールは、ソクラテスと倫理学について語りながら、実はソクラテスと教育に肉薄し、これを描き出していたのである。

以上、ここでは、ノールと青年運動の学生達を結びつけていたものは何であったかという点に一つの解釈を試みた。次の課題は、そのような出会いの中で、ノールが青年の本質をどのように理解していたかを明らかにすることである。

3. 青年運動解釈における青年理解

1). 先に触れた1914年の論文『教育における世代関係』は、青年運動の影響により生じた世代関係の動揺もしくは変化について、その積極的な意味と危険性を教育的観点から検討したものである。それはまた、世代関係という観点から青年運動を教育史的、教育学的に位置づけようとした試みであるとも言えるし、青年運動の新たな展開のために、指針を与えようとした試みであるとも言えるものである。

ここにおいてノールは、もともと一種の依存関係である教育的関係において、被教育者の固有性と権利とが徐々に認められていったことが「教育における進歩」(PA, S. 113)であったとする。そして、啓蒙主義の教育学からルソー、ヘルダーによる深化を経て、フィヒテにおいてこの思想は一つの頂点に達すると考える。すなわち、子供達は「精神の自立的王国」(PA, S. 116)へと陶冶されねばならない。そのような陶冶は、世俗的生活の中で墮落した大人の手によってはいけいない。若い世代は、古い世代からむしろ切り離されなければならない。今や事態は、古い世代が軽蔑されるところにまで至った。青年の教育の場は、世俗的生活と古い世代とから切り離された青年の自律的共同体でなければならない。このようなフィヒテの教育論に至って、ノールは、青年運動の教育的本質を特徴づける視点を獲得することになる。

すなわちノールは、青年運動をフィヒテにまで至る以上のような新しい教育学の展開を総て継承し、完成にもたらしたものと位置づける。そしてさらに、次のような点にその独自の展開を見いだす。すなわち、これまでは教育家、思想家がこの道を切り開いてきたのに対し、青年運動においては、「青年が自らを解放したのであり、そして自分達でその固有の世界と、目標と、方法と、組織とを創造する権利を要求する」のであると(PA, S. 117)。

さて、一方でこのように青年運動を「教育における進歩」としての歴史的展開の中に積極的に位置づけつつ、他方でノールは、そこに一つの根本的な疑念を投げかける。すなわち、古い世代からの切断により、「青年の生の最も深い要素」が失われはしないかという疑念である。すなわち、「権威と従順」という要素である(PA, S. 119)。

ノールによれば、青年の様々な道徳的特性は、先行世代との「心情的、意志的關係」(PA, S. 120)の中で育まれるものなのである。たとえば、畏敬、尊敬、敬虔、感謝がそうである。そして、意志陶冶もまた成長した人の意志との交流を基礎とするものであるとされる。さらには、そもそも「青年は他者の意志を通り抜けることによってのみ発達するのであり、それは、青年の『本質』に属することなのである。そして、あらゆる理念は、抽象的な姿において彼らに作用するのではなく、人格という姿を通してのみ彼らに経験されるのである。」(PA, S. 120)

換言するならば、青年は青年を超えるものとの関わりにおいてのみ全き意味において、そして本質的な意味において青年でありうるわけである。それでは、青年を超えるもの、すなわち先行世代、成人世代の本質をノールはどう捉えているのか。成人の本質とは、成熟した人格である。ノールはそれを「男らしさ」(Männlichkeit)と特徴づける。そしてその核心を、「支配(Herrschaft)の要素、すなわち統御(Regierung)への内的、外的力、認識と行動の一貫性において統一的に貫徹される完結した意志の力」(PA, S. 119)に見いだす。ここで言われる「支配」が、単に外面的に他者に向けられたものでないことは確かである。それは、自己を統御しうるが故に他者に責任を負いうるということ、他者に責任を負いうるが故に他者に要求もしうるということを意味するものであろう。

さて、以上のようなノールの青年論において、我々は彼の次のような青年理解を取り出すことができる。すなわち、一方でノールは、「新しい教育」の先端に位置づけられるものとしての青年運動における青年の理念を受容する。それはまた、本稿がノールの内なるものとして見いだした、かのシュトゥルム・ウント・ドラング的生命感情を本質的要素として分有する人という理念であると言える。それは高慢なまでの自負と、限りない憧憬と、自律への意志と、活力に満ちた青年の理念である。

他方において、青年は成熟した意志との関わりにおいて発達すると考えられ、それは青年の本質に属するとされている。青年は、成熟した人格の意志を受容することを通して、やがて自らの意志の自由を獲得し、自らも成熟した人格へと至るべき存在として捉えられているのであった。上の青年の理念は、本稿が一貫してノールの生命感情として確認してきたものの延長線にあるものと言える。それに対しこのような理解は、本稿としては新たに確認するものである。しかしこれもまた、ノールの内的思想の投影であることにはかわりはない。いずれにせよ、このような青年の本質の二重の捉え方は、ノールの青年理解のいわば原型とも言えるものであり、それ故本稿の今後の展開において最も重要な視点を提供するものである。

2). 青年運動は、さらに『ドイツにおける教育運動』(Die pädagogische Bewegung in Deutschland, 1933)¹²⁾において、教育改革運動の中の「基礎的運動」の一つという位置づけにおいて詳細に論じられている。この青年運動の運動としての推移についてのノールの解釈の中に、我々は再び、彼の青年理解を読み取ることができる。

ここにおいて青年運動は、二つの視点から解釈される。まず第一に、それは、ドイツ運動の新たな段階の中に位置づけられる。ドイツ運動とは、シュトゥルム・ウント・ドラング以降、まさに教育改革運動の時代にまで至る精神史の過程に一つの内的連関を見いだしたノールがこれに与えた名称である。¹³⁾ 彼は、シュトゥルム・ウント・ドラングとドイツロマン主義と、そして青年運動を初めとするノールの生きた時代の諸改革運動とをこのドイツ運動の「三重の衝撃」(DB, S. 88)と理解する。すなわち、この三つのうねりには共通の理念、共通の衝動が見いだされると解釈する。端的に言うならば、その理念とは、ドイツ運動が一貫して希求した「より高次の精神的生の新たな統一」の理念であり、衝動とはこの「統一」への衝動である。ノールの言葉を引くなら、「それは、究極的には我々の存在の形而上学的根底との新たな関係に根ざし、この究極的統一からかの総ての分離を止揚し、文化の死せる諸形式に再び生命を与え、内面からこれを形成しなめようとする精神的生の統一である。」(PB, S. 12)しかし、とりわけこの三つの運動ないしは潮流が「衝撃」と言われているのは、当然のことながら、それらにおけるこの理念の希求の激しさを表現するためである。

第二にノールは、青年運動それ自体を三つの発展段階において捉えている。¹⁴⁾ 第一段階は、とりわけワンダーフォーゲル運動に代表されるものである。すなわち、この段階において青年運動は、何よりも現実社会、とりわけ大人達の社会を否定し、そこから逃避することを試みた。まさにワンダーフォーゲルは、都市を離れ、自然の中を渡り歩いた。同時にそれは、青年自身の手による自発的、自律的な共同体を形成しようとする運動であった。ノールの言葉を引くなら、「フィヒテがかつて新しい理想的生を構築するために青年を年長者から完全に切り離そうとしたように、今やまた青年は、生の解放を自ら手にすることを欲していた。」(PB, S. 16) かくしてノールは、ここにまさに「ドイツロマン主義運動の甦り」を、すなわち「目的に拘束されず、価値を深く信じる青年の精神に基づく新しい文化の試み」を見るのである(PB, S. 14)。

この時期、ワンダーフォーゲル以外にも様々な青年の集団がそれぞれ独自の活動を展開していた。すでに触れたゼーラ・クライスもその一つであったわけである。さらには、ワンダーフォーゲル自体も統一的組織を持っていなかった。1913年、ホーアー・マイスナーにおいて青年運動の大集会が催された。ノールによれば、ここにおいてそれら多様な集団は、その差異を保持しつつも互いが一つの運動に属していると感じるに至った。かくして一つの運動として自覚された青年運動は、今や「新しい存在感情」(PB, S. 16)に侵されることになる。それは次のような三つの要素からなるとされる。すなわち、「青年であることの固有の意味の認識……、過去ではなく現在と未来を、伝統ではなく創造的な生成を見つめる視線、そして最も内奥にあるものとして、人間の自然、その衝動、その身体性への新たな信仰」(PB, S. 16)である。このような解釈に従えば、青年運動の運動としての自己認識は、まさに青年の青年であることの本質的自己認識でもあったと言えるであろう。

第二段階は、第一次世界大戦以降に始まるとされる。それは、青年運動あるいはそれに参加した青年達が、社会的課題を引き受けていく過程とされる。すなわち、これまで同志的な共同体の中で育まれてきた生の理想が、今や民衆の全体において実現されねばならないという認識が生じるに至った。青年達は、「我が民族の未来に対する責任」(PB, S. 17)を自覚するに至った。かくして彼らは、その運動が自己教育、相互教育という形態において持っていた教育的エネルギーを社会的な場における他者教育へ、すなわち社会教育へと移し換えていくことになる。まさに、「青年運動の第一世代の最良の人々は、……ほとんど例外無く教育的タイプに属しており、そして教育において自らの生を実践的に実現する場を求めていた」のであった。

第三段階は、青年運動が教会、政党などの諸機関に取り込まれ、数量的には飛躍するが、その本来の性格を喪失する段階とされる。ノールは、この段階の始まる時期を明確に確定してはいないが、1920年代後半にはこのような傾向は顕著となると言える。¹⁵⁾ ノールは、ここにおいて青年運動における現実への関わりかたが一変するのを見る。第一段階以来青年運動は、「青年のロマン主義的精神」に衝き動かされて現実と対立し、現実から離反しつつ発展してきたとされる。しかし今やノールは——まさにこの段階は『ドイツにおける教育運動』執筆中のノールにとって同時代的状況であった——「日常生活、所与の生活空間、大都市、労働、技術、国家」等々、かつて青年が超えていこうとした現実が運命として受容されていくのを見るのである(PB, S. 22)。

第二段階もまた社会的現実が引き受けられていった段階であると捉えられていた。しかし、それはあくまで、第一段階において青年固有のものとして獲得された本質が社会化されていっ

たということを意味するものであった。これに対し第三段階においては、根本的に主客の転換が見いだされているのである。すなわち、今や青年の生の重心は、自らの主体性、自主性ではなく、「国家的もしくは宗教的内実」に帰依し、客観的諸勢力を自らの生を本来的に規定するものとして承認すること」(PB, S. 22)にあると。

このような状況は、客観的勢力が独断的、排他的となるととき党派的对立を生み出し、一つの勢力が他を圧倒するとき全体主義を生み出す。ノールは、この『ドイツにおける教育運動』において、次のような言葉で青年運動に関する記述を終えざるをえなかったのである。「その心配なのは次の点である。すなわち、この新たな単純化と集中化が……自由な精神性を阻害してしまうのではないかということである。しかし、この自由な精神性こそが純粋な青年の真の勇気であり、真の希望なのである。」(PB, S. 23)

さて、このような青年運動の運動としての発展段階は、同時にそれに参加していた青年の人生の過程でもあった。青年自身の人生の転換と重なりあうものであった。ノールによれば、青年運動がその第二段階を迎え社会的課題に取り組んでいったとき、青年自身もまた「成熟した男性的(männlich)年齢に至った」のである(PB, S. 17)。『教育における世代関係』において、成熟した人格の特性として語られていた「男らしさ」(Männlichkeit)の概念がここにおいても登場する。今や青年は、ロマン主義の気分における自己陶醉、自己満足から抜け出し、社会的問題に目覚め、社会的責任を引き受け、社会的課題に取り組むことを通してそのような年齢段階に至ったのである。

かくして、以上のような青年運動の発展段階についての解釈からも、我々は、ノールの抱く青年像を読み取ることができる。すでに見たように、青年運動自体がある意味で青年の自己認識の運動と捉えられていたのであるし、このように、青年運動の発展過程は青年自身の人生の過程と重なるものとして捉えられているからである。青年運動を語ることは青年を語ることであるからである。

まず第一に、運動の第一段階において青年たちを支配していた気分、理念が注目されねばならない。すなわち、シュトゥルム・ウント・ドラングとロマン主義の延長線上にあるとされる気分、理念である。青年達は、そのような気分、理念に侵され、そのような理念を追及した。それはまた、青年のある本来の姿であった。その故にノールは、「青年の精神に基づく新しい文化の試み」(傍点は筆者)と言ったのであった。

ここではシュトゥルム・ウント・ドラングとロマン主義と青年運動の差異は問題ではなく、その共通する精神が問題なのである。それがノールの言う「青年の精神」なのである。しかし、シュトゥルム・ウント・ドラングとロマン主義は、またそれぞれの独自性においてこの「青年の精神」の内包を豊かにしうる。本稿は、すでに『教育における世代関係』において、シュトゥルム・ウント・ドラング的生命感情を本質的要素とする青年というイメージを取り出した。今やこれにロマン主義的憧憬が加わるのである。¹⁶⁾

第二に、ノールは青年運動の発展過程に青年の成熟の過程を見ていた。青年は確かに固有の存在であるかもしれないが、決して固定的な存在ではない。成熟へと差しかけられているということ自体、青年の本質に属することなのである。このような理解もまたすでに『教育における世代関係』に表されている。ただ、今や成熟は、社会的連関に移し換えられて問題とされるに至っているわけである。

すでに我々は、『教育における世代関係』においてノールの青年理解の原型として、青年の

本質の二重の捉え方を見いだした。それは再び、青年運動解釈において、歴史的、社会的連関の中で、さらに豊かな内包と共に語りだされているのである。

4. 社会教育学における青年理解

1). すでに触れたように、ノールの本格的な教育学的活動は、第一次世界大戦後に社会教育の領域において始まる。とりわけ民衆大学運動と青年福祉活動において、ノールは実践的、理論的に主導的役割を果たしていく。特に青年福祉に関する理論的貢献を集大成したのが、すでに触れた『青年福祉—社会教育講演集』であった。

すでに、その題名からして、この講演集はノールの社会教育学が全体として青年に焦点づけられたものであることを示唆している。もちろん、その諸講演からは、彼の青年理解があるいは直接的、あるいは間接的に読み取れる。

『社会福祉事業における男性社会事務所員と社会教育学』(Der männliche Sozialbeamte und die Sozialpädagogik in der Wohlfahrtspflege, 1926)の論点の一つは、福祉活動の担い手となるべき男性の社会事務所員に、女性の福祉活動家の「母性」に相当するような固有のエートスは、「固有の内的形式」(JW, S. 18)はあるかというものである。ノールによれば、それは存在する。つまり、「騎士的精神」(Ritterlichkeit)である。「全体への人格を賭けた活動的献身、指導的立場を引き受ける覚悟、そしてとりわけ弱者に対するある非常に特徴的な補助と気配りの態度、すなわち、常にこの弱き人の内なる自立の人間を尊敬し、敵に対する恭しきや敗者へのいたわりという形においても示される態度」(JW, S. 17)等々を要素として含む精神である。それはまた、イギリスのジェントルマン教育、ドイツの田園教育舎等において典型的に見られるように、一つの理想の人間類型として教育の目標であり続けたものであるとされる。¹⁷⁾

このような騎士的精神が、すでに見てきた成熟した人格の特性としての「男らしさ」の概念と一脈通じるものであることは明らかである。「男らしさ」とは、一方で「支配」の力、「意志の力」を有し、他方で社会的責任を引き受け、社会的課題を遂行する用意を持っていることであった。成熟した人格の持つこのような意志力、責任感、課題遂行能力を基盤としてのみ、弱きを助ける騎士的精神は可能となると言える。

かくしてこのような成熟した騎士的精神が、青年と出会うこととなる。騎士的精神が福祉活動家のエートスたりうるのは、それが、彼らが出会う人々を何かしら引きつけ、何かしら彼らと共鳴するものであるからでなければならない。とりわけノールの教育学においては、そのような人格的共鳴が教育の核心とされるのである。¹⁸⁾すでに引用した言葉を繰り返すなら、「あらゆる理念は、抽象的な姿において彼らに作用するのではなく、人格という姿を通してのみ彼らに経験されるのである。」あるいは、やはりこの講演集に収められた『青年福祉活動の精神的エネルギー』(Die geistigen Energien der Jugendwohlfahrtsarbeit, 1926)において、ノールは最後に次のように述べている。「この助けは、まず第一に他の誰でもない君に、君の孤独な自我に、君の埋もれて助けを求めている人間性に捧げられているのだ」(JW, S. 13)と。

ところで我々は、ここで語りかけられている「君」が、単に年齢段階においてのみならず、まさにその本質において青年に他ならないということを知る。何故なら、目覚めてはいるが未だ確固たる基盤を有していない多感な自我こそが、すなわち青年の自我こそが最も容易に孤独に陥りうる。同様に、理想への憧憬を抱く青年の純な人間性こそが最も悲劇的に埋もれ、助け

を求めうるからである。

繰り返すなら、かくしてこのようにして成熟した騎士的精神が青年と出会うのである。他者の中に「自立の人間」を認める騎士的精神が、自立をもとめて葛藤する青年の心にかかる影響を及ぼしうるか、多言を要すまい。ノール自身もまた次のように言う。「教護教育の対象者であってさえ、騎士的に扱われるなら、彼の騎士的精神を発展させうる。」(JW, S.17) 騎士的精神は、成熟した人格の一つの理想像として、人格の一つの理念として青年に影響を与えると同時に、教育的態度の一つの形式として青年を励ますと言えよう。

さて、このような騎士的精神論は、成熟の視点から逆に青年の本質を浮き彫りにすると言える。すなわち、騎士的精神を成熟した人格の一理想型と捉えるなら、そのような精神へと差しかけられた存在としての青年の本質が浮き彫りになる。あるいはこれを教育的態度の一つの形式と捉えるなら、それに最も良く励まされる存在としての青年の本質が浮き彫りになるのである。

その際、両者は基本的には同一のものであると言える。すなわち、騎士的精神という特殊な形式かどうかを括弧にいれるなら、まさに成熟した「男らしさ」へと差しかけられた存在としての青年像がここに浮かび上がって来るのである。かくして、本稿がこれまで確認してきたノールの二重の青年理解の一方のものが、ここにおいても読み取りうるのである。¹⁹⁾

2). 青年論そのものが展開されているのが、本稿の序で触れた『思春期の性格特性』である。当然のことながら、『青年福祉』の中でこれは福祉活動が基礎として踏まえるべき青年理解を与えるものという位置づけを持つと解釈される。青年論そのものとはいえ、これがただちにノールの内的青年理解、青年観を反映したものかどうかは速断できない。青年を対象化することが、かえってこれを自らの内なる青年から遠ざけるということもありうる。以下個々の記述の裏に密む彼の青年観に照準を当てつつ、その内容を検討する。

この思春期の性格学を進める際のノールの基本的な立場もしくは視点は、存在の自然科学的に説明(erkklären)できる次元と、精神科学的に了解(verstehen)されるべき次元との両方を視野に入れるということである。何故なら、このような二つの方法により明らかにされる二つの次元は、人間存在の固有の二重性を浮き彫りにするからである。さらには、この二つの次元の相剋は、青年期に独特の刻印を与えるものであり、青年自身の人生にとって重大な意味をもつ経験を生ぜしめるからである。ちなみに、『性格と運命』における人間学においても、このような二重性の視点はその基本的枠組みを成している(CS, S. 24 ff.)。

青年期は、言うまでもなく身体的成長と性的成熟の時期である。この身体的、生理的变化にともない、その反映として一連の新たな心理状態が、精神生活がもたらされる。そのうち特にノールが重視するのは、ビューラー(Charlotte Bühler)が「補充要求」(Ergänzungsbedürftigkeit)と特徴づけたような、異性への関心あるいは憧憬である。

同時にノールは、男子においては、異性への関心が単なる憧れであるに留まらず、ある種二元論的な構造を持つ点を強調する。そしてこの性的衝動と精神との「二重性の経験」、両者の緊張の経験が彼らの精神生活において重要な意味を持つとする。すなわち、このような緊張関係の経験からこの時期に特有の罪の意識が生じる。おそらくは、補充要求と裏腹に生じる孤独感もこの経験と交錯することによりその深刻さを増す。ここにおいて青年は、他者の助力なしに自己自身で戦う他はない。かくしてここにおいて、青年の内に「宗教への最初の一步」が踏みだされうるとされる。「純粋さへの意志」に根拠を持つ宗教への第一歩である(JW, S. 42)。

このような「二重性の経験」が、まさにかの人間存在の二重性に由来するものなのである。次に、ノールは、性的成熟には依拠しない純粹に精神的な衝動、すなわち了解されるべき部分における衝動を取り上げていく。

まず第一に論じられるのは、「自律への意志」(JW, S. 43)である。子供時代から与えられていた生活世界、価値、権威、人間関係、総ての既成の枠組みが疑われ、あるいは拒絶されるに至る。もはや青年は、飛躍しつつある自らの悟性、自らの洞察力のみを頼むこととなる。かくしてこの時期、青年は時として合理主義的主知主義的となり、また時として独善的ともなる。しかしまた彼は、行為においても判断においても極めて非合理的でありうる。つまり、彼には経験の裏付けが欠如しており、全く無拘束であり、「悟性は現実の客観性よりも自己の心情の弁証法に奉仕する」(JW, S. 44)からである。

次いでノールは、この自律への要求と相即的に「新しい基準への要求」(JW, S. 44)が生じるとする。すなわち、古い価値の否定は、必然的に新しい価値の発見への意欲と、自ら発見した価値への献身とにつながるのである。またその際、未だ過去の経験に拘束されることの少ない青年は、一挙に無制約的な絶対的価値基準へと駆り立てられがちである。現実との妥協は軽蔑される。青年の理想主義、熱狂、革命的過激さは、ここに基づくとされる。

また、ノールによれば、このような理想主義的な価値基準は、自分の自我、自分の環境世界に対しても向けられることになる。子供時代に形成されてきた客観的性格はもはや厭われ、こうありたいという新たな理想的性格、それ故多分に主観的、虚構的な性格が演じられることとなる。相変らず自分の現実的部分しか見ない家族との付き合いは不快なものとなり、ポーズの部分で付き合える他人の方が好ましくなる。同じことが自分の環境世界についても言える。青年は、自ら好んでそのような環境の中に生まれてきたのではないと考える。そして、自分の力で自分の理想にかなった新たな環境を獲得したいと考えるのである。

かくして、以上のようにして、もう一つの緊張関係が、すなわち理想と現実との緊張関係が生じるとされる。それは、一方で青年に不調和、不機嫌、苛立ちをもたらし、他方で夢や空想へと彼らを導くとノールは考える。空想自体にある種の生産性があることは明らかである。しかしまた、自らの夢と、それが決して現実でないという意識との段差が、青年を苦しめることとなる。それはまた、単に夢と現実という一般的な対立に留まるものではない。すでに見たように、この時期青年は、自らの客観的性格を超えて、自らかくありたいという性格を作り上げようとする。あるいは、そのようなイメージに従って振る舞い、感じようとする。今や青年は、そのようにして形成されつつある人格そのものの虚構性に悩むことになる。

さらにノールは、青年の理想主義と関わって、その「美的性格」(JW, S. 50)及び「形而上学的態度」(JW, S. 51)について論じる。すなわち、ノールによれば、プラトン以来美は感性的に現象する唯一の理念である。それ故、感性的に接近しうるものである。かくして青年は、理想主義の衝動に駆られつつ、まずこの比較的接近しやすい美へと向かうこととなる。加えて青年には、現実との対峙やその受容を必要とする「行動」(Handeln)という形での自己表出よりも、虚構のなかで遊びうる「表現」(Ausdruck)に傾くきらいがある。「踊り、音楽を奏で、詩作するというこの安易な道」において、再び青年の感情の非現実性は増進されていく。それを抜けきれないでいる限りは、「成熟した男性的(männlich)生活への移行」は遂行されないままであるとされる(JW, S. 51)。

現実との妥協をよしとしない青年にとって、理想を現実の人物等の中に見いだすことは困難

である。かくして青年は、絶えざる憧憬と希求へと駆り立てられていく。ノールによれば、これが青年のロマン主義である。ここにおいて無限なるもの、絶対的なものへの「より高次の形而上学的憧憬」が、「宗教的胸騒ぎ」が青年の心の内に生じることになるとされる（JW, S. 51）。

これに対しノールは、「成熟した男性的存在」を比喩的に「古典主義的」と特徴づける。それは、「若者がそのような絶対的なものを現実の中に捉え、安らぎを見いだしたところではじまる」（JW, S. 51）。すなわち、理想が現実の中に見いだされ、追及され、均衡のとれた力強い生がそこに開始された状態と解釈されよう。そのような状態に至りうる一つの契機は、「宗教的熟慮」であるとされる。しかしまたそれは、「即物性へのあらゆる展開」によってもたらされる。すなわち、就職、婚約等がそのような転機を提供しうる。人はここにおいて、次のような経験をするのである。「現実……既にそれ自体において価値内実を持っており、何も私の登場を待たねばならないわけではない。まさに、私が自分の手で獲得したいと思う総ての価値は、むしろ私が自らをこの現実へと適合させ、その具体的な課題を自らに引き受けることから生じるのだ。さらには、より高次の生の総ての意味は、無限なるものを小さなもの、日常的なものにおいて実現し、隣人を愛することにおいて生じるのだ。」（JW, S. 52）²⁰⁾

以上が、『思春期の性格特性』の概要である。その青年についての心理学的分析、精神科学的解釈の中に、我々は、いくつかの注目すべき点を取り出すことができる。まず第一に、青年の生が二元論的に把握されている。自然科学の対象の次元と精神科学の対象の次元、とくに性的衝動と精神の二重性、理想と現実との緊張関係、理想的性格と客観的性格、ロマン主義と古典主義等々。ノールによれば、「これら緊張関係は、彼の生活の秘密であり、そのより高次の存在の力の源泉である。……緊張関係が途絶える時、俗物根性が始まる。」（JW, S. 53f）「この若者達の緊張に満ち満ちた危うい生活と興奮の高まりは、同時に後の総てのまじめな生活のための実り豊かな土壌である。」（JW, S. 54）第二に、このロマン主義と古典主義の関係に関わって、我々はここにおいてもノールの青年理解の原型としてすでに確認した二重の捉え方を見いだすのである。すなわち、シュトゥルム・ウント・ドラング的、ロマン主義的本質と成熟へと差しかけられた存在としての本質という二重の本質の捉え方である。

『思春期の性格特性』は、1925年に行われた講演の草稿である。ここで個人の発達の次元の問題として語られていること、すなわち、現実の具体的課題を引き受けることによる成熟という図式が、1933年の『ドイツにおける教育運動』において、すでに見たように、青年運動の発展段階の問題として語り出されることになるのである。

5. 人間学における青年的特質

1). 『青年福祉』には、すでに触れたノールの人間学的モデルを青年とその問題の理解のために応用している講演が収められている。水平構造モデルを使用しているものとして、『青年の犯罪の心理学的理解のために』（Zum psychologischen Verständnis der Tat des Jugendlichen, 1926）、特に垂直構造に依拠している論として、『非行少年の教育』（Die Pädagogik der Verwahrlosten, 1924）がある。人間学は、社会教育学のみならずノールの教育学全体の中で独自の意味を持つ一つの領域を形成する。従って、本稿の主題である青年の問題との関わりにおいても、それは独自に考察される必要がある。

ノールの人間学の基本的枠組みとなっているのは、何と言っても垂直構造モデルである。こ

ここにこそ、彼の人間観、生命感情は最も良く表現されている。²¹⁾ 従って、本稿の連関において重要であるのは、『非行少年の教育』であろう。ここにおいてノールは、垂直構造モデルを視点とすることにより、非行少年の心理を階層構造において理解し、この心理的層のそれぞれに対応した教育的課題を明らかにしていく。

ここにおいても垂直構造モデルは、人間を衝動の層、気概の層、精神的根本方向の層、及び人格の統一作用の層という四層において捉えるものとされている。このようにして明らかにされる人間の心理的、精神的生に対してノールは、次のような教育的課題をたてる。「各々の層がそれぞれに応じて配慮されていなければならない、また同時に各々の層は全体においてそのしるべき位階を維持しなければならない。」(JW, S. 105) 彼は、古い教育が主としてこの文の後半部分を考慮していたのに対し、新しい教育学はその前半部分を重要視すると考える。いずれにしろ教育学は、このような課題を遂行するため、これら各層の特質とその全体における位置関係を理解しなければならない。

ノールは、各々の層のそれぞれに応じた配慮を教育学的に極めて重視する立場をとる。この点は、彼の衝動及び気概に関する理論を見れば一目瞭然である。衝動の層に関しては、ノールは精神分析の意義を指摘する。精神分析の影響のもと、この層に関する教育理論は発展してきた。まさに精神分析は、衝動を単なる抑圧すべき対象とする一面的見方から救い出した。『青年の犯罪の心理学的理解のために』においても、この点は言及されている。すなわち、過度に抑圧された衝動は異常な通路によってその解放を求め時としてそれが犯罪行為をももたらすと。しかしまた、精神分析のそれぞれの流派は一つの衝動に依拠したのであり、またそれらにおいては、人間存在の他の層の意義と課題が無視されていったということも指摘される。いずれにせよ、この層に関わる教育的課題としては、過度の抑圧でもなく過度の刺激でもない「正しい摂生」(JW, S. 112) が重要であるとされる。

これに対し気概の層に関しては、ノールによれば、従来充分には研究がさなれてきていない。しかし彼は、この層の意義を重視する。歴史的には、ストア派の教育学と心理学、あるいは古代ギリシアの体育、騎士教育、イギリスのスポーツ教育等々「あらゆるアゴン(競争)の教育」(JW, S. 107) がこの層に依拠したものとして挙げられる。スポーツその他の様々な競技において経験される、エネルギーを燃焼させることの喜び、それに伴う昂揚感は、心の階層構造において衝動を超えた層が支配権を得ることを助ける重要な教育的契機であるとされる。

精神的根本方向の層は、学問、芸術、宗教、職業、社会等々あらゆる領域における「より高次の興味」(JW, S. 108) の層であるとされる。それは覚醒されうるが、決して「教説」によってではなく、「行為的、共同的生活」によってであるとされる(JW, S. 108)。また、可能な限り個性を尊重し、見極めることにより、その子供にとって最も容易に開花しうる興味を見いだすことが重要とされる。教護教育においても、このような高次の興味の覚醒は重要である。たとえば作業などは、青年にとって職業への自然な興味に連結するものであり、それ故、その教育的意義も大きい。しかしその際、非行少年には単純労働で充分だといった考えは誤りである。作業の中に精神活動も含まれるべきであり、施設のための労働の際にも、自分は作業を通じて共同体の生活に貢献しているのだという意識を持つことができるのでなければならないとされる。

しかし、あまりに興味が拡散するような場合には、人格が散漫になる恐れがある。すなわち、第四の層の自我の統一が形成されない場合である。ノールによれば、非行少年にはこのような

例がしばしば見られ、それ故またこの自我の統一の形成も教護教育の重要な課題の一つになる。自我の統一とはいかなるものか。ノールの言葉を引くならば、次のように説明される。「我々の内には、一つの確固たる点がある。我々はそこから秩序と規律のある生活を形成する。我々はそこから然りか否かを言いうる。我々の自由はそこに基礎づけられている。端的に、それは我々が我々の内なる『人格』と呼ぶものである。」(JW, S. 110)このような自我の統一、あるいは人格の存在によって、人は自己について責任を持ち、さらには他者に対しても責任を引き受けるようになる。彼は、頼りになる自律の人間となる。

さて、このような自我の統一の形成に関しては、青年とりわけここでは非行少年の意志をまず自由なものとして扱い、その自由な意志に訴えることが重要であるとされる。その時、約束、誓い等で彼を拘束することも可能となる。彼に責任を持たせることも可能となる。自らに責任を負いうるようになる時、そこに自己に対する尊敬の念が生じうる。カントの言うように、我々は、道徳的自己規定の主体に対してのみ尊敬の念を持つからである。すなわち、我々は、若者に責任を持たせることによって彼を尊敬するし、彼自身の内に自己に対する尊敬の念を生ぜしめるのである。ノールの言葉を引くなら、非行少年にとっては、「彼らもまた責任ある『人間』として信頼されているのだという新しい経験は、大きな道徳的力となるのである。」(JW, S. 112)

以上のようなノールの非行少年教育論において、次のような二点に注目しておくことが、本稿の連関においては重要であろう。すなわち、まず第一に、第二層の気概及び第三層の精神的根本方向において青年のシュトゥルム・ウント・ドラング的、ロマン主義的傾向が表現されているということ。第二に、第四層の自我の統一の形成という課題が究極的には青年の本質的課題としての成熟の問題に関わるものであるということである。すでに見てきたように、ノールにとって成熟とは、現実的な課題を引き受け、自己と他者に対し責任を負いうるようになるということの意味していたのであった。

2). 以上は、階層論の人間存在モデルが青年理解——とりわけ非行少年理解——に応用されている例である。しかしこのことは、単に一般的な人間存在モデルが青年という特殊な状況の理解に応用されたというだけのことなのか。あるいは、このモデルはとりわけ青年の本質を捉えるのに相応しいということが言えるのか。以下のこの点を『陶冶の理論』における被教育者論に探ってみよう。

『陶冶の理論』における被教育者論には、衝動の層に関わる記述は無い。ここではとりわけ被教育者の「陶冶可能性」と「陶冶意志」が主題とされており、それ故、陶冶理想の達成に向けてのより積極的な条件に考察は集中していくこととなる。

そのような意味において気概には、極めて積極的意味付けがなされることになる。すなわち、気概はここでは「活動における歓び」「高まりの感情」等々と表現される(PB, S. 162)。一方でそれは、人間の心的、精神的な生活において、それ自体として自律的な意味を持つとされる。この「歓び」この「感情」は、何かの為というのではなく、それ自体として人間の生を充実せしめるのである。

他方で、気概は、人間の心的、精神的な生の全体構造において、衝動の層から精神的根本方向、自我の統一の各層への架け橋としての位置づけを与えられている。何かあることを追及し、あるいはある課題を遂行する。この活動自体において「歓び」は経験される。だからこれに没頭しうるのだが、同時に人はこの没頭経験において、あるいは理念の世界に高まり、あるいは人

格的自由を獲得する道歩んでいるのである。従ってそれは、「あらゆる自由な行為のスプリング」であり、「最も重要な諸徳の基礎」とであるとされる (PB, S. 163)。かくして、「このような経験において、あらゆる男性的 (männlich) で勇敢な教育の可能性は存しているし、また女性的本質の美しい晴朗さもここにその基礎を持つ」 (PB, S. 162) と言われる。

精神的根本方向もまたここにおいては、成長の原動力という観点からその意味が捉え直されている。すなわち、「憧憬」、「予感」と言われるような、未だ見ざるもの、究極的、全体的なものへの精神的衝動、あるいはそのような意味での「より高次の興味」 (PB, S. 169) が、この層における作用として捉えられている。この部分において人は理念の世界からの呼びかけに応答するのである。

さて、このようなより高次の興味が単なる興味として終わり、消えうせることなく、何かしら内容的なものを掴み取るために、何らかの形式、定式の力が必要となる。すなわち、「概念の、あるいはあらゆる体系的思考の統一において、並びにあらゆる形態化に潜む統一意志において働く精神の統一」 (PB, S. 176) が登場しなければならないとされる。「意識化」あるいは「自己省察」とも言われる作用である。『性格と運命』においては、「もはや鳥のように飛び去ることなく、弁証法のかすがいにより繋ぎとめられた諸概念の矛盾なき統一」 (CS, S. 32) と言われている。

ノールは、青年期に「明晰さと固定へと到達しようとする意志」は最も強くなると考える。そして、またそのような意識化の作用により「生の偉大な昂揚」がもたらされるとする。しかし同時に、この作用は生の非合理的にして創造的な力と対照的な関係にある。従ってこの作用があまりに圧倒的なものとなる時、生の活力は失われる危険があるとされる (PB, S. 176)。

このような作用は、作用自体としては階層論にあてはめればすでに第四の層に属するものと解釈される。それは、究極的には自我の統一作用に由来するものなのである。ただ、この統一作用は本来純粹に形式的なものとされるが故に、たとえばある概念の内容としての理念自体への関わりは、第三層に属するものとみなされる。

自我の統一作用それ自体に関しては、ここにおいても『非行少年の教育』におけるとほぼ同一の見解が示されている。すなわち、自己自身に対する責任を負わせ、自己確立への自我の力を覚醒せしめること。そのことにより、我々は、彼を人間として尊敬し、彼も自分自身を尊敬しうることになること。これらのことが、より高次の生の確立のための究極的教育手段と考えられているのである。

さて、以上のような階層論的人間存在モデルに基礎づけられた被教育者論は、差し当たっては特に特定の年齢段階を対象とするものではない。しかし実質的にはそれは、一つの発達段階の理念的特質を描きだすものとなっている。全く一般的に被教育者を論じながら、実質的には一つの発達段階、すなわち青年期に焦点づけられている。それは、この人間存在モデルそのものの特質であると言える。

たとえば、気概が「活動における歓び」と捉えられる時、それは確かに幼児にも学童にも認められよう。しかし、ノールがここで活動と言う時、特にそれは目標が設定され、それをなし遂げることが課題として自覚され、それ故そこに緊張が伴うようなものを意味する。それは、「意志の経験」 (PB, S. 163) であるとされる。この点でそれは、幼児の遊びとは区別される。

同時にそれは、精神的存在へと飛躍するための原動力として見做されるものであった。活動力が最も高まり、生命の最も躍動する時期が青年期であるということは別にするにしても、精

神的存在への飛躍を本当の意味で語りうるのは青年期、あるいはそれ以降であると言えよう。また、「男性的で勇敢な教育」、「女性的本質の美しい晴朗さ」は、このような活動経験に基づくと言われていた。ノールが「男性的」と言う時、それは度々見てきたように、成熟した人格の特性を表すものなのである。まさに気概は、青年期における成熟への原動力でありうるのであり、ノール自身の問題関心もこの点に置かれていると言いうるのである。

「予感」とは、幼児の内に萌芽的にまどろむ理念への憧憬に対してフレーベルが与えた名称であった。ノールもまた、第三層に由来する成長の原動力の一つとして、フレーベル的な意味においてこれを取り上げているのであった。しかし、理念への憧憬がもはやまどろみの状態を抜け、はっきりと覚醒するのは青年期である。新たに目覚め、燃え上がる憧憬は、青年の生の一つの本質特徴を成すのである。

自我の統一もまた、とりわけ青年期の課題であると言える。周知のようにエリクソンは、青年期の課題を、自我同一性の確立に見いだしている。すでに見たようにノールは、自我の統一を、いわばカント的な意味で人格主義的、倫理的に把握している。すなわち、自己に責任を負い、さらに他者に対する責任をも引き受け、つまり社会的責任を引き受けていくなかで自我の統一は確立されていくと考えている。責任を負いうる人と見做される時、頼りにされる人となる時、人は社会的文脈において成熟に達したと言われる。自我の統一の確立は、成熟への到達を意味するのである。

以上、繰り返すなら、ノールの被教育者論は、ノール自身が直接意図するとしないとにかかわらず、必然的に青年の本質へその理念へと焦点づけられていると言える。それは、その基本的枠組みを提供している階層論的人間モデルが、青年の生の理念的内容を極めて良く表現しているからである。気概にしる、理念への憧憬にしる、課題としての自我の統一にしる、まさにこのモデルは、青年の生の理念的特質から構成されていると言っても過言ではないのである。

この青年の生の理念的諸特質は、一方においてそれぞれ極めて一般的に受容されているものと言えよう。しかしそこから、一つの全体的な青年像をイメージしようとするなら、我々はこのにおいてもまた、かの二重の捉え方を確認することができる。シュトゥルム・ウント・ドラング的、ロマン主義的本質と成熟へと差しかけられた存在としての本質という二重の本質が、ここにおいても語りだされているのである。

またすでに示唆したように、このような階層論的存在モデルはノールの人間観、生命感情を色濃く反映したものであると言える。従って、それが青年の生の本質を良く表現しているということは、ノールの人間観、生命感情自体にながしか青年の本質と呼応、共鳴するものがあるということを再び推測せしめるのである。

さて、本章の課題は、ノール教育学のいかなる領域からいかなる青年理解が語り出されているかを明らかにすることであった。今、考察の成果をここに要約するならば、次のようになる。まず、本章において、ノールの青年運動論、社会教育学、人間学という三領域において、彼の青年への特別な関わり、関心が見いだされることが明らかとなった。青年運動論において青年の問題が論じられるのは当然のこととして、社会教育学においても特に青年の福祉が大きな主題とされており、福祉活動の前提あるいは基礎として青年の心理学、性格学が試みられていた。人間学、特にその中心に位置する階層論的人間存在モデルは、青年の生の本質を極めて良く表現するものであった。

以上の三つの領域は、ノール教育学において極めて重要な位置を占めるものである。青年運動との関わりは、ノールを教育学の世界に導いた一つの大きな契機であった。社会教育学は、ノールの教育学の実践的部分とも言いうるものであり、特に第一次世界大戦以降1930年代初頭に至るまで彼の活動のほとんど総ては、ここに集中されていたのであった。そしてこの社会教育学において、さらには教育学の理論的体系において、かの階層論的人間存在モデルはその人間学的基礎を提供するものなのであった。これら主要部分において青年への特別な関係、関心が示されているということは、ノール教育学の一つの特質であると言えよう。

それでは、それら諸領域において直接、間接に語り出されていた青年理解、青年像はいかなるものであったか。我々はここに、二重の捉え方を一貫して見いだしてきた。すなわち、一方で青年の生は、シュトゥルム・ウント・ドラング的、ロマン主義的本質を持つものとされ、他方においてまた青年は、成熟へと差しかけられた存在として捉えられているのであった。同時に、このような捉え方、青年理解は、ノールの人間観、生命感情の核心部分と何らかの関係があることが推測されるのであった。

Ⅲ. ノール教育学における青年理解の特質——関心のあり方の問題として

1. 同時代的関心

以上の考察において明らかなように、ノールは体系的な青年の学を構築しようとしたわけではない。最もまとまった青年論と言える『思春期の性格特性』すらも、『青年福祉』においてほんの20ページほどを占める簡潔なものである。それ故、たとえば同時代の青年論と言えるシャルロッテ・ビューラーの『青年の精神生活』(Das Seelenleben des Jugendlichen, 1921)、あるいは、エーデュアルト・シュプランガーの『青年期の心理学』(Psychologie des Jugendalters, 1924)等と同列に置いて、つまり青年学の系譜の中で比較してノールの青年理解の特質を云々することは、あまり意味が無い。むしろ本稿は、ノールの教育思想の本質を解明する一つの視点としてこの問題を取り扱うのである。このような観点から重要であるのは、前章で見たノールの青年理解の内容だけでなく、青年の問題に対する彼の関心のあり方なのである。

この点に関しまず第一に銘記されねばならないことは、ノールの関心は青年の本質についての客観的、抽象的知へと向けられたものではなかったということである。つまりそれは、単に知的な関心ではなかった。かといって実践的関心という言葉によってもそれは充分表現されえない。何故なら、ノールにとって青年とは、単に実践の対象でもなかったからである。

すでに見たように、ノールにとって青年とは、とりわけ青年運動に参加していた学生達であった。ノールは、彼らの求めに応じて青年の教育を論じ、彼らと共に歩む中で青年運動を、青年福祉を論じた。まさにその青年論は彼らと共にあり、彼らと共にあることの中から語られたのであった。その意味で我々は、ノールの青年への関心を同時代的関心と特徴づけることができよう。ノールの青年論は、その内容の一般的、普遍的意義もさることながら、むしろ同時代の青年について言われた言葉、同時代の青年に向けて言われた言葉と解する時、よりその本質を捉えることができるのである。

青年運動の第一段階の精神的傾向を特徴づけるものとされていた理想的、青年的生への憧憬、ロマン主義的本質、それはまさにイエナにおいて出会った学生達の中にノールが見ていたもの

に他ならない。やがて青年運動は第二段階へと至り、青年達は成熟し、社会的責任を果たすべく社会教育へ、福祉活動へと献身していったとされる。しかし彼らを社会教育へと導いたのは、他ならぬノールその人なのであった。繰り返すならば、ノールの教育的生は、——とりわけナチスにより公的活動から追放されるに至るまでは——絶えず青年と共にあった。この同じ時代、同じ教育的生を共有した青年達についての、そしてこの青年達に向けての言葉としてノールの青年論は解釈されるべきなのである。

しかし、それは讃歌ではありえなかった。まさにこの時代の現実がそれを許さなかった。ノールは、青年運動の第三段階を国家や宗教等の客観的勢力に帰依していった段階と捉えていた。そして、そこに青年の「自由な精神性」の危機を感じ取ってした。しかし、すでにこの言葉が世に出た1933年には、ナチスは政権を奪取するのであった。ノールは、ロマン主義的現実逃避から現実的課題への立ち返りに青年運動の第二段階以降の展開を見だしていた。しかし、青年運動が立ち返っていくべき現実は、それが希求した新たな人間性の理想とはかけ離れた方向へ、全体主義へ、戦争へと突き進んでいった。まさに、青年運動の悲劇であった。

しかし、それは第二の悲劇であった。第一の悲劇とは、すでに青年運動の第一段階の担い手達の多くが第一次世界大戦において没したことであった。すでに見たように、その中には、ノールの愛弟子が幾人とも含まれていた。彼は言う。「第一段階の青年運動がそこに結集した、かの新しい『自由ドイツ』青年を知っている者は、誰一人として深い痛みなしに彼らのことを思い起こすことはできないであろう。彼らの多くは、戦争で没したのであった。」(PB, S. 16)

やがて青年運動そのものが消滅し、ドイツの青年は第二次世界大戦とその敗戦を体験する。この時期ノールには、青年論と云うものは見いだせない。しかし、この新たな状況の中で青年の問題がますますノールの重要な関心事となっていくことは確かである。

たとえば、彼は1946年にシラーについての講義を行っている。シラーといえばノールにとっては、シュトゥルム・ウント・ドラングの渦中を生き、古典主義の芸術においてその理想主義的思想を究めた巨匠として、まさにドイツ精神そのものの青年期と成人期を象徴するような存在なのであった。この講義について、ノールは次のように語っている。「このシラーの講義は、1920年、当時戦争から帰還してきた学生達にドイツ的精神の現実性についての証を示すために初めて行われたものである。私はこれをさらに1946年に、その状況がより苛酷なものとなって繰り返された時にもう一度講義したのであった。」(FS, S. 5)まさにそれは、青年のために行われたのであった。

翌年の講演『現代のドイツにおける精神的状況』(Die geistige Lage im gegenwärtigen Deutschland, 1947)においてのべられているのも、主として青年の精神的状況である。すなわち、国家主義の言説を受け入れ、「昂揚した倫理的熱狂の内に生きた」青年達は、戦後一転して「民族の絶え間ない恥辱に苦しみ、その内奥の自己感情において傷つけられている。」(P30J, S. 258)かくして青年達の心を虚脱感が支配している。彼らはもはや、率先して指導的立場に就こうという意志も、政治的活動への意欲もない。「大仰な言葉、声高なプロパガンダ、あらゆる類の宗教的理論などに対する懐疑」(P30J, S. 261)が彼らにはびこっているとされる。

しかしながらノールは、このような精神的状況の中にも青年達の間に一定の価値感情、生活理想を認めていく。すなわち、「素朴な生活」(P30J, S. 260)、あるいはささやかなもの、

日常的なものに美と永遠とを見るような牧歌的精神性である。もはや、政治にしる思想にしる日常生活から遊離した次元にあるものは彼らには信じられない。身近な生活の充足、充実に彼らは生きようとしている。ノールはそう考えるのである。

すでに我々は、『思春期の性格特性』において、「より高次の生の総ての意味は、無限なるものを小さなもの、日常的なものにおいて実現し、隣人を愛することにおいて生じるのだ」というノールの言葉を見た。そのような経験を通り抜ける中で、人は成熟するとされているのであった。しかしそれは、ロマン主義的な精神の彷徨の後の決断としての自己限定を意味するものであった。それは、ニヒリズムとはおよそ無縁の、現実の場における生産的生活の出発を意味するものであった。

1947年の時点においては、青年の日常志向はこのような積極的な成熟の契機としては捉えられていない。むしろそこに見いだされる政治的現実からの逃避的傾向は、ノールの立場から言えば、成熟の回避を意味するものとなろう。しかしノールは、またここにおいても肯定的な意味を見いだしていく。すなわち、従来ドイツの精神世界を支配していた教養と日常との分離は、このような青年の新しい態度を一つの糸口として解消されうるし、また解消されねばならないとノールと考える。さらには、「数の上で男性よりはるかに多く生き残り、またナチズムの時代にも一層よく耐えた」女性、「そのより人間的な精神性、その生活実践へのより近い関係、その快活さと母性」をもって各方面で一線に立ちつつある女性にも同じことを期待しつつ、次のように言う。「女性と青年は、民衆的ヒューマニズムを創造していかなければならない。それこそが、我が国民に新しい精神的始まりを可能にするのである」と (P30J, S. 264)。ここにおいても再び我々は、新しい時代を生きる青年に向けられたノールの言葉を見いだすのである。

2. 生命感情の共鳴

すでに本稿は、Ⅱの1及び2において、ノールと青年運動はその生命感情の次元で共鳴しあうものであったこと、及びその生命感情とはシュトゥルム・ウント・ドラング的生命感情と言いうものであったことを明らかにした。この点は、ノールの青年に対する関心のあり方の問題としてここに再び考察される必要がある。すなわちノールにとって青年とは、単に自己の外にあって共に生きる存在であったわけではない。彼の内に青年が存在していたのである。この内なる青年との共鳴という形で、彼の青年への関心のあり方は特徴づけられるのである。

プロホマンによれば、ノールは一貫して理論的体系といったものの構築には執着することができず、常に現実に関わりかけ、現実の中で生きることを欲していたのであった。²²⁾ このようなノールの基本姿勢、あるいは性向をかのシュトゥルム・ウント・ドラング的生命感情の現れと解釈することは可能であろう。

さらにこの点に関して興味深いのは、すでに触れたドイツ運動である。ノールは、1911年に『ドイツ運動と観念論の諸体系』(Die Deutsche Bewegung und die idealistischen Systeme, 1911)を発表し、1921年から1947年にかけてゲッティンゲン大学において数次にわたりこれに関する講義を行った。このドイツ運動の概念を仕上げていく作業の中で、ノールは自らの思想的基盤を形成していったと言える。その意味でそれは、「彼の思想がそこに根ざし、彼の後のすべての活動がそこから生じ、それ故またそれらがそこからのみ適切に理解されうところの精神的底層」(DB, S. 7)と言われるものなのである。

かくしてドイツ運動の中に、すなわちノールの紡ぎだした概念としてのドイツ運動の中に彼

の生命感情の反映を見いだそうとすることは、的を得た試みであると言える。その際、まず手掛かりとすべきは、すでに見た「三重の衝撃」という言葉であろう。すなわち、シュトゥルム・ウント・ドラング、ドイツロマン主義、教育改革運動といういわばドイツ運動の三つのうねりに対して与えられた言葉である。ここにドイツ運動の本質の総てが表現されているわけではない。この点は次節において補足することになる。しかしそれは、確かにその最も根源的な衝動が表出された瞬間であったということは言えよう。合理主義よりも非合理的主義に生命の燃焼を実感し、形式の束縛よりも形式からの解放を求め、現実の無批判、無自覚な受容よりも現実のかなたにあるものを求め、さらには、かなたの理想から現実の改革を志す。そのようにして、より高次の精神的生の実現へと向かうドイツ運動の究極的な憧憬が最も激しく人々を駆り立てたのが、この三つの時代であったと言えよう。

このようなドイツ運動の衝動、憧憬がいかにかノールの教育学、教育思想に反映されているかという問題については、筆者はすでに他の箇所でも論じた。同時にそこにおいて、そのような衝動、憧憬は、ノールの内面的、あるいは根底的生命感情と共鳴するものであることを示唆している。²³⁾ この点について本稿の連関から言い直すならば、次のようになるだろう。すでに『ソクラテスと倫理学』、『ヨハン・ゴットフリート・ヘルダー』という初期の論文において語り出されていたと言えるノールの根源的生命感情は、ドイツ運動という精神史的連関において、特にその「三重の衝撃」において、より広汎に共鳴の対象を見いだしていくことになる。この根源的生命感情を本稿はシュトゥルム・ウント・ドラング的と表現したが、今やそれはロマン主義、青年運動等にも通じるものとして、より多様なニュアンスを内包したものとして捉え直されねばならないわけである。

この点はすでにⅡの3の2)において論じたのであるが、シュトゥルム・ウント・ドラング的な生命感情を青年的生命感情の一本質として特徴づけることが可能であるとするなら、より広汎なドイツ運動的生命感情もまた青年的と言ってもよいものであろう。特にかの「三重の衝撃」に凝縮されたそれは、むしろ青年の生の本質を象徴するものであるとさえ言えよう。シュトゥルム・ウント・ドラングについては言うに及ばず。ロマン主義によって青年の日の憧憬を特徴づけることは、決してノールの独創であるわけではなく、むしろ常套手段である。さらには、これら「三重の衝撃」を通して息づいている、かの「より高次の精神的生の新たな統一」への衝動、憧憬自体が、その理想の高さの故に、またそれが衝動であり憧憬であるというまさにそのことの故に、すなわち現実へのある種の遠い距離感の故に、極めて青年的なものであるというのである。

かくして我々は、ノールの思想史研究上の作業を通して、彼の生命感情が青年的なものであったということを知りうるのである。すなわち、彼の内に青年を見ることができるのである。逆から言えば、このような内なる青年的生命感情が、ノールをしてあれほどまでに青年運動に引き寄せたのであり、青年福祉へと関わらせたのである。また、内面的生命感情は当然のことながら世界観と人間観とを規定する。ノールの世界観が思想史的概念として結実したのがドイツ運動であるとするならば、その人間観の理論的結実、かの階層論を骨子とした人間学であると言えよう。かくしてすでに述べたような解釈が成立するのである。すなわち彼の内なる青年的生命感情の故に、ノールの人間学は青年の行為や生活の理解のための有効な視座を提供するものであったのであり、またそれ自体青年の生の本質を良く表現するものであったのである。

以上が、ノールの青年の問題への関心のあり方として特筆されるべきことの第二点目である。

すなわち、それは生命感情における共鳴を基盤とした極めて内在的なものであったと言えるのである。

3. 両極性 (Polarität)

次いで、上の生命感情についての論を補足する意味で、ノールの思想における——おそらくはやはりその生命感情の次元の問題である——両極性の問題とその青年理解との関係について考察する。

ノールの思想の根本傾向は、実は一面的にシュトゥルム・ウント・ドラング的、ロマン主義的ではなかった。そのことは、またドイツ運動自体が証明している。彼の「精神的底層」としてのドイツ運動の本質は、かの「三重の衝動」によって酌み尽くされるものではないのである。ドイツ運動は、これにより表現されるシュトゥルム・ウント・ドラング的、ロマン主義的本質と極めて対極的な本質をも合わせ持つものであったとされているのである。すなわち、カントの哲学に代表されるような啓蒙主義的、合理主義的本質である。ドイツ運動とは、これら二つの要素があい拮抗して展開されていった運動と捉えられているのである。²⁴⁾ さらにはまたすでに見たように、ノールの人間学の階層論の人間モデルも、一面的にシュトゥルム・ウント・ドラング的、ロマン主義的ではなかった。それはそのような昂揚しゆく生を制御する自我の統一作用との対極的構造を表現しているものであった。

さらには、ファウストの精神性と牧歌的精神性、生命と形式、「存在と規範、主観と客観、現在と未来という教育の根本的二律背反」(PB, S. 129) 等々ノールの思想は、まさに様々な両極性に満ち満ちているのである。これらについては、筆者は他の箇所考察の対象としているのでここでは立ち入らない。²⁵⁾

さて、再三指摘してきたように、ノールは、青年をその二重の本質において捉えているのであった。すなわち我々は、その青年論においても両極的視点を見いだすことができるのであった。もう一度繰り返すなら、シュトゥルム・ウント・ドラング的、ロマン主義的本質と、成熟へと差しかけられた存在としての本質である。ノール自身も青年の本質をロマン主義的、成熟の本質を古典主義的と特徴づけていた。いわば青年は、ロマン主義の本質を有しつつ古典主義へと差しかけられた存在とされているのであった。

もちろん、ノールはここにおいて自らの思想の根本的視点としての両極性を青年理解に演繹的に応用したというわけではない。むしろ彼のそのような視点が、青年のある本質と呼応しあったということであろう。この両極性の問題を生命感情の次元にまでおろして考えるならば、次のような解釈が成り立とう。すなわち、ノールが共に生きた青年とノールの内なる青年が、一方でそのシュトゥルム・ウント・ドラング的生命感情において共鳴し合っていた。それに対し、他方でノールの内なる成熟した男性的存在が、やはり生命感情の次元から、成熟へと向かう青年へと絶えず語りかけていたのであると。これはまた、とりもなおさず青年への内面的な関心のあり方の問題である。すなわち、青年理解の二重性に対応する形でノールの青年への関心のあり方もまた二重であり、あるいは両極的であったと言えるわけである。

4. 教育的関心

すでに述べたように、青年は固有の存在ではあるが固定的な存在ではない。むしろ青年は劇的に変化しゆく存在である。青年期は変化の直中にある。シュトゥルム・ウント・ドラング的、

ロマン主義的本質というのも、また成熟へと差しかけられた存在というのも、まさにこの変化しゆく存在の特性を言い表すものに他ならない。人間のこのような変化への関心、とりわけ共感的関心は、教育的関心となりうる。特にこの共感がより善き変化への願いを含む場合、そうならざるをえない。ノールにおいても、青年への関心はまさに教育的関心であったと言えよう。

我々はすでにⅡの2においてノールの内なる教育的衝動について触れた。彼は学問領域としての教育学に足を踏み入れる以前に、すでに教育的関心を抱き、教育的生活を営んでいたのであった。彼に接する学生達は、彼の「飲びに溢れた」生命感情に、「自分の学生達の生活や考えに親身な関心を寄せていた」態度に引きつけられていった。いわば、彼の内なる青年の生命感情と成熟した配慮とに引きつけられていった。まさに彼はそのように青年に関わっていたのであった。

そのように関わらざるをえないものがノールの内にあったという意味で、筆者は教育的衝動と言った。しかし、そのような関心、そのような接し方は別の意味でも教育的と言うに相応しいものであったと言える。すなわち、それはそれを受け取る者に対して極めて教育的な影響を及ぼさざるをえないという意味においてである。フリットナー、ヴェーニガー (Erich Weniger)、後に触れるボルノー (Otto Friedrich Bollnow) 等々、彼の門下からは幾多の教育学者が、そしてまたすでにⅡの2で触れたごとくに幾多の教育実践家が育っていった。少なくとも、後に教育の世界で重要な仕事をするようになる人々が、若き日にノールのもとに集まっていった。そして何よりも、ノールに接した学生達が未だ教育学者でもない彼に教育学の講義を求めたというところに、その教育的影響力、教育的魅力のほどを我々は窺い知ることができるのである。

ノールの青年への関心は、極めて教育的なものであった。その教育学における青年理解の特質を問うなかでこのような点をことさらに強調するのは冗漫かもしれない。しかし重要であるのは、ノールにとって青年への関わりは初めから教育的関わりであったということである。つまり、彼においては青年と教育は初めから切り離すことのできないものであったということである。そもそも青年の問題抜きに、ノールの教育学は語れないわけなのである。

Ⅳ. ノール教育学にとっての青年の意味

ノールにとって、あるいはその教育学にとって青年とは何であったのか。青年理解の内容の問題としてはⅡにおいて、青年への関心のあり方の問題としてはⅢにおいて、この点について論じてきた。それにより明らかになったことは、ノールにとって青年の問題は極めて内在的なものであったということである。それは、彼の生命感情における、思想の根源的次元における問題なのであった。彼の青年論は、彼の生命感情、彼の思想の反映なのであった。あるいは、彼の生命感情が、思想が、青年という問題に、互いに響き合い、必然的に引き寄せ合うものを見いだしたのであった。そしてそのことが、ノールの教育学における青年の問題の位置をおのずと規定しているのである。

かくして今や、ノールの教育学にとっての青年という問題の意味が最終的に明らかになる。すなわちそれは、まさに彼の教育学の内在的な意味での主要関心事であると同時に、まさにそのことの故に、ノールの教育学の本質を生命感情の次元において明らかにする視点という意味を持つものと言えるのである。

先に触れたボルノーは、ノールの教育学の紹介に際して、一方で彼が内面的な生命感情の次元でシュトゥルム・ウント・ドラングに、そして青年運動に心引かれていたと言い、他方で「快活さ」、「気概」、「男性的」であること、「騎士的精神」等々を一連の特質として捉え、「彼の教育学の全体は、そのような誇らしく、男性的で (männlich)、自らの力を確かに実感している生命により規定されている」と言った。²⁶⁾あるいはまたプロホマンは、すでにイエナ時代のノールを評して、「多面的で力強い生命感 (Lebendigkeit) と確かな人間的態度 (Haltung)」が学生達に大きな印象を与えていたと言う。²⁷⁾いずれもノールの人格及びその反映としての彼の教育学の根底的部分における青年的なものと成熟した男性的なものについての証言として受け取ることが出来よう。あるいは、それらがノールの人格のみならずその教育学をも根本的に規定する本質であったということの証言とも捉えることができよう。

すなわち本稿は、ノールの青年理解の考察を通して、プロホマンがノールの人格の内に見だし、ボルノーがその教育学を規定する生命として確認したものと同じ本質にたどりついたのである。かくして本稿は、ボルノーにならい次のように結論づけるのである。ノールの教育学の全体は、青年的かつ男性的生命に規定されていると。

注

- 1) 以下ノールの著作から引用する場合、次のような省略記号とその頁数とを共に記す。
 (PB) Die pädagogische Bewegung in Deutschland und ihre Theorie, 8. Auflage, Frankfurt / M. 1978
 (SE) Sokrates und die Ethik, Tübingen 1904
 (DB) Die Deutsche Bewegung. Vorlesungen und Aufsätze zur Geistesgeschichte von 1770-1830, hrsg. v. O. F. Bollnow und F. Rodi, Göttingen 1970
 (PA) Pädagogische Aufsätze, zweite vermehrte Auflage, Langenzalza 1929
 (JW) Jugendwohlfahrt. Sozialpädagogische Vorträge, Leipzig 1927
 (CS) Charakter und Schicksal. Eine pädagogische Menschenkunde, 7. Auflage, Frankfurt / M. 1970
 (FS) Friedrich Schiller. Eine Vorlesung, Frankfurt / M. 1954
 (P30J) Pädagogik aus dreißig Jahren, Frankfurt / M. 1949
- 2) Vgl. E. Weniger, Herman Nohl und die sozialpädagogische Bewegung, In : Zeitschrift für Pädagogik, 1966, 1. Beiheft.
- 3) E. Blochmann, Herman Nohl in der pädagogischen Bewegung seiner Zeit 1879-1960, Göttingen 1969, S. 77.
- 4) W. Flitner, Erinnerungen 1889-1945. Gesammelte Schriften Band 11, S. 154f.
- 5) E. Weniger, a. a. O., S. 9.
- 6) E. Blochmann, a. a. O., S. 58.
- 7) E. Weniger, a. a. O., S. 5.
- 8) W. Flitner, a. a. O., S. 123.
- 9) E. Blochmann, a. a. O., S. 67.
- 10) E. Blochmann, a. a. O., S. 68.
- 11) W. Flitner, a. a. O., S. 118.
- 12) 『ドイツにおける教育運動』は、先に触れた『陶冶の理論』と共に『教育学ハンドブック』(Handbuch der Pädagogik)の第一巻に載せられたものである。両論文については、拙稿『「教育運動」とヘルマン・ノールの教育学』愛媛大学教育学部紀要 第I部 教育科学 第37巻, 1991を参照されたい。
- 13) ドイツ運動に関しては、拙稿『ヘルマン・ノールの教育学における「陶冶意志」の視点』教育哲学研究第54号, 1986, 44-47頁を参照されたい。
- 14) 拙稿1991, 3-4頁を参照されたい。
- 15) Vgl. F. Blättner, Geschichte der Pädagogik, 14. Auflage, Heidelberg 1973, S. 276. E. Spranger,

Pädagogische Perspektiven, 5. Auflage, Heidelberg 1958, S. 29ff. ウォルター・カラー, 西村稔訳『ドイツ青年運動—ワンダーフォーゲルからナチズムへ』人文書院, 1985, 159—162, 189, 190頁。ちなみに、ホーアー・マイスナーにおいて結成された「自由ドイツ青年」が革命後の左翼, 右翼の政治的対立状況の中でもみくちやにされながらついに姿を消すのは1923年の終わりころである。その後無数の「ブント」(Bund)が青年運動の主流となる。シュブランガーは, 青年運動を「本来のオリジナルな青年運動」の局面と「ブント的青年」の局面とに俊別する。前者は「大人達のあらゆる影響, あらゆる権威, 否すべての支配的文化様式から」自らを解放しようとした青年の運動とされる。そしてその「最も根源的で全く共通の生の表出は常に自然の中での渡り歩き(Wandern)であった」とされる。それはまた一方で, 解放の後に何を求めるかを明確にしえず, 現実における自己決定を前に絶えず自らを留保するロマン主義的傾向に支配されていた。しかし他方で, 確かに「人格の自由な自己決定」というドイツ理想主義の精神がここにおいて青年達の間に具現されていったとされる。この局面はまさに1923年に終わるとされる。

さらにシュブランガーによれば, 「ブント的青年」の局面に至り青年運動は政治に接近し, 大規模な組織化が試みられ, しかもその組織の多くは軍隊の形態を模したものとなっていた。そして, それら組織相互の間には極めて激しい対立が生じた。諸ブントの活動の中心は, もはや現実逃避的なものではなく, 現実の民族文化, 民族生活への奉仕活動に置かれるに至った。あるいはまたラカーによれば, ワンダーフォーゲルの理想が遍歴学生であったとするなら, ブントの理想は軍人であった。すなわち, 後者は前者に比べはるかに集団の規律, 指導服従関係を重視し, またはるかに社会的, 政治的現実を意識していた。政党, 教会が取り組んでいったとされる青年運動の形態とは, このブントの形態なのであった。

- 16) この点は, 本稿Ⅲの2において再び論じる。
- 17) ノールの論との直接の関係は問えないが, 騎士はまたブントにおける理想像でもあった。ブントは, 騎士団たろうとしていた。ウォルター・ラカー1985, 171, 206, 269頁を参照されたい。
- 18) 拙稿1986, 50—54頁を参照されたい。
- 19) Vgl. O. F. Bollnow, Herman Nohl und die Pädagogik, In : Zeitschrift für Pädagogik, 25. Jg. 1979, Nr. 5, S. 666ff.
- 20) この引用文の最後の箇所は, ノールの思想において極めて重要な位置づけを持つ「牧歌的」精神性について語っていると考えられる。ノールは, 『ドイツの二重の精神性とその教育的意義』(Die zweifache deutsche Geistigkeit und ihre pädagogische Bedeutung, 1932)その他において, 人間精神の基本的類型としての「ファウスト的」精神性と「牧歌的」精神性について論じている。両精神性は, ノールの思想自体をも根底的に規定していると言える。ところでノールは, この「ファウスト的」精神性の概念をもって青年の生を, 「牧歌的」精神性の概念をもって成熟の本質を特徴づけてもいる。例えば, 『啓蒙期の叙情詩』(Die Lyrik der Aufklärung, 1946)においては, 「シュトゥルム・ウント・ドラングという青年の運動において, 若きゲーテにおいて, 若きシラーにおいて」「憧憬という状態」が登場したのに対し, 「啓蒙期の成熟した男性的(männlich)叙情詩は, これに対し所有の感情から歌う」と言われている。「憧憬という状態」「所有の感情」は, ここではそれぞれファウスト的精神と牧歌的精神を表現するものである。この両精神性については, 拙稿『ヘルマン・ノールの教育学における「牧歌的なもの」の概念』教育哲学研究第57号, 1988を参照されたい。
- 21) 拙稿1986, 48—50頁を参照されたい。
- 22) E. Blochmann, a. a. O., S. 111, 123.
- 23) 拙稿1986を参照されたい。
- 24) Vgl. H. J. Finckh, Der Begriff der 《Deutschen Bewegung》 und seine Bedeutung für die Pädagogik Herman Nohls, Frankfurt / M. 1977.
- 25) ファウスト的精神性と牧歌的精神性については拙稿1988を, その他については拙稿1991, 21—24頁を参照されたい。
- 26) O. F. Bollnow, a. a. O., S. 663f.
- 27) E. Blochmann, a. a. O., S. 67.